

私のカルテ

No 3 5 6

津島市民病院
小児科医師 永田正幸

抗生物質って？

○×クイズ

第1問 抗生物質はウイルスをやっつける**第2問** 風邪やインフルエンザに抗生物質は効果的だ

<抗生物質って???)>

答えはどちらも×です。間違えた方、がっかりしないで下さい。あなたは決して少数派ではありません。一般市民を対象としたインターネット調査でも正解者は25%もいませんでした。

(参照:医療機関等における薬剤耐性菌の感染制御に関する研究「国民の薬剤耐性に関する意識についての研究」)

第1問の解説 細菌とウイルスは種類の違う病原体です。

抗生物質は細菌感染症に対するお薬であり、ウイルス感染症には絶対に効きません。

第2問の解説 風邪やインフルエンザはウイルスによる感染症です。なので、抗生物質は絶対に効きません。

インフルエンザに対して処方されるのはインフルエンザウイルスに対する抗ウイルス薬というお薬で、抗生物質ではありません。

<そんなこと言われても・・・>

中には「でも風邪をひいた時にはいつも抗生物質を処方されてきた」という方がいます。風邪に対して抗生物質を処方する医師が多くいることは事実です。そういう医師は「念のために抗生物質を出しておきますね」という理由付けをすることが多いと思います。確かに風邪に細菌感染症を合併する可能性が全く無いわけではありませんが、これまで健康であった人に関してはほとんど無いと言っていいでしょう。それに、小児によく処方されているセフゾンやメイアクトは腸管吸収率が非常に低く、内服薬では効果があまり期待できません。抗生物質が必要な重症細菌感染症であれば、内服ではなく入院して点滴注射で治療すべきなのです。

また「抗生物質を飲んだら風邪が治った」という方もいます。風邪は通常は数日すれば自然に治るものです。抗生物質が効いたのではなく、自然に治る時期と重なっただけと考えられます。抗生物質は熱さましではありません。

<害が無いならいいのでは?>

通常は体内に存在しない物質が入るので、副作用の無い薬はありません。抗生物質にも下痢～ショックなど様々な副作用が報告されています。でも抗生物質の不適正使用によってもっと大変な問題が起きているのです。それは「薬剤耐性」の問題です。「薬剤耐性」とは「微生物による感染症に対し、抗微生物剤が無効になる、又は、製剤による効果が減弱する事象」とされています。要するに細菌感染症に対して抗生物質が効かなくなることです。

<うちの子に関係ないでしょ?>

薬剤耐性の問題は世界的な問題となっていて、2015年の世界保健総会では、「薬剤耐性に関するグローバルアクション・プラン」が採択され、世界保健機関(WHO)加盟各国に2年以内の自国の行動計画策定を求めました。G7サミットでも主要議題の一つとして扱われ、日本でも2016年にはG7サミット議長国として薬剤耐性に関する取組を強化するため、「薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン」が策定されました。薬剤耐性の問題は、空間的(日本だけでなく世界中の子どもたち)にも、時間的(あなたの子供だけでなく孫やひ孫)にもグローバルな問題なのです。耐性菌は急速に増加していますが、新しい抗生物質はほとんど開発されていません。多くの抗生物質に耐性のある細菌も見つかっています。このままでは近い将来、細菌感染症の患者さんに効く抗生物質が無くて治療できないという状況になるのは目に見えています。未来の子どもたちのために、医師と患者さんが協力して抗生物質の適正使用を推進し、薬剤耐性菌を増やさないようにしましょう。

<参考になる資料→検索してみてください>

・抗微生物薬適正使用の手引き第一版(厚生労働省健康局結核感染症課)→全部読むのには多すぎるので、患者さんへの説明例の部分だけでもどうぞ

・薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン2016-2020(国際的に脅威となる感染症対策関係閣僚会議)→少し難しいですが、冒頭のところだけでもどうぞ

